
パン

貞次シユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パノ

【Zコード】

Z4368A

【作者名】

貞次シユウ

【あらすじ】

ゲームセンターで一人の男女にキャッチされた小さなぬいぐるみ『パノ』。そのぬいぐるみが見た男女のノンフィクションストーリー。

僕はぬいぐるみ。小さなぬいぐるみ。

赤いとんがり帽子に金色の髪。笑った目と大きな口にはチャーム
ポイントのハート歯があつて、緑の服に黄色のズボン。
右手には笛を持った小さなぬいぐるみ。

名前は…えっと。

『パノ』

そう、パノって呼ばれてた。

ずっと暗い箱に閉じこめられたままで、むづびのくらいい経つたん
だろう？

ずっと前、僕はゲームセンターのICOキャラの中でのぬいぐるみ達に埋もれてたんだ。

ある日、一人の男女が僕らの前にやつて来た。

『あー！あれパノッティ？』

女人人が僕を指さしてそう言つた。

『あ、ホント。パノッティだ！！』

男の人はちょっと興奮気味に財布を取り出しながら相槌を打つた。
僕はどうやらパノッティというキャラクターらしい。僕のどこが

良かつたんだろ?

力チャン力チャンと小銭を投入する音が聞こえると、僕の上から小さなクレーンが降りてきた。

あ…挟まれた。持ち上げられる…あ、落ちた。

『あー、惜しい』

男の人は悔しそうにそう言つと、続けざまに小銭を投入してゐる。

『今度は取る!』

僕はそれからも何度も落ちては口口口口転がつて、ちょっとイライラしちゃつたけどね。

でもそのうちにクレーンにしつかり掴まれて、丸い穴の中へ放り込まれたんだ。

スルスルっと滑り落ちると、すぐに暖かい手で抱き上げられた。目の前には綺麗な女人の人。

『可愛い』パノ君だあ

僕は『パノ』と、その時名付けられたんだ。

その後家に連れてこられると、僕はサイドボードの上の馬のぬいぐるみにもたれかかるようにしてポンと置かれた。

そのお馬さんにはライスシャワーって名前が書いてある。なんだか居心地が良いので、僕はここが気に入った。　男の人と女的人は一緒に住んでいるようだ。

男の人は『シユウ』って呼ばれていて、女人は『ミカ』って名前らしい。

二人はいつも楽しそうに喋って、料理を作つて、洗濯して掃除している。すごく仲が良くて幸せそうだ。

『あたしたちの子供みたい

『そりだね。こんな子供作るうね

時折一人して僕を見つめはそんな事言つてくれたんだ。
少し照れるけどすぐ嬉しかったよ。

何日かすると僕はシユウに抱かれて外に出た。

どこ行くの？捨てられちゃうの？

一人は大きな荷物を抱えて車に乗つてね、僕を手に取ると

『はーい、ここがパノの席』

……、ダッシュボードの上に前を向いて座らされたんだ。

僕一番前

車が走り出すと今まで見たことない外の景色が流れしていく。

うわあ、すごいなあ。どこまで行くんだろう？

僕は嬉しくて持つてゐる笛を吹きたくなつた。
でも僕はぬいぐるみだから吹けないんだ…

車はどんどんどんどん走つていつて色々な所に行ってね、たくさん
たくさん色んな珍しいものを見たんだ。

車を降りるとき、シユウは僕をシャツの襟元に突っ込んで顔だけ
出してくれたの。

一人で見てる景色を僕も一緒に見てたんだ。
海の上に浮かぶ島から煙がモクモク出てた。
夕日が沈むところも顔を赤くして三人で見てた。
星がすごく近くに見える山の上で、首が痛くなるくらい二人で夜
空を見上げたりもした。

楽しいな 楽しいな

僕は良い家族に出会えたんだな。

それからすぐよく賑やかな所にも行つたんだ。
空を飛ぶ乗り物でね、遠くまで行つたよ。
広いところに珍しい建物がたくさんあって、ネズミとかアヒルの
着ぐるみ着た人が手を振つてる。

『次、スプラッシュユーマウンテンね!』

『だいぶ列ふんじゃないの?』

『これは乗つとかないと!』

なんだか長い行列に入つてずーっと待つた。時折すごい叫び声が聞こえてくるんだけど…

『パノ濡れない?』

『大丈夫だろ。それに最後の写真にコイツ写ってなかつたら可哀想じゃん』

うわーい 写真大好き。僕はいつもニコニコ笑つて写るんだ。

やつと僕らの順番が回つてきた。
大きな丸太みたいな乗り物に乗り込んで、水の上をプカプカ浮かんで進むんだ。
でもすごく暗いトンネルを進んでくと…

『キャーっ！』

て歓声の中、一気に下に落ちるんだ！
スゴい！面白い！

やつと光が見えてきて、もう終わりかな？って思つたら最後にドーンと下の池に向かつて落ちた。
水しぶきがキラキラ光つて僕らに降り注いできたけど気にならない。だって面白いんだもん
シコウモミカもすごく楽しそうに笑つてる。

降りるときにはもう僕らの写真が出来ていた。最後に落ちるところだ。いつの間に撮つたんだろう?

うん、ちゃんと笑つて撮れてる。えらいぞ、僕。

ショウとミカが行くところには必ず僕も一緒に連れて行ってくれた。

北海道に行くと、馬に食べられそうになつた。

沖縄に行くと、突然の雨でびしょ濡れになつた。
ずっと僕はこここの子供で、ずっと色んな所に連れていつてもうらえ
るんだつて…ずっと、ずっと思つてた。

ある日ミカがすごく怒つてショウに食いかかつた。ショウは口数
少ないけど何度も謝つてるみたい。

そのつづきは大声で泣き出した。

泣かないでよ。泣かないで。ミカが悲しいと僕も悲しいよ。慰めてあげたいけど喋れないんだ。

僕はぬいぐるみだから…

それから一人は何度となくケンカをするよつになつた。僕はあれ
以来ずーっとライスシャワーにもたれかかつたままだ。そしてその
ケンカを悲しい気持ちで見てたんだ。

ある日、またケンカが始まつて、ミカが家を飛び出していつたん
だ。

ねえショウ、追いかけないの？

シユウは僕を抱き抱えるとベランダに出た。下には車に乗り込むミカの姿が見える。

ミカが車に乗つてどこかに行くよ?なんだか悲しいよ。ミカはどこに行くの?泣かないで答えてよ。僕は三人で暮らしたいよ。夜の帳の中へミカの車は消えてしまった。

俯いたまま何時間も何時間もシユウは動かないんだ。

でもそのうち玄関のドアが開いた。

シユウは玄関に飛び出していつて、それでミカに何回も叩かれて怒られた。

ミカは泣きながら怒つて、でもやつぱり一人抱き合つて仲直りしてた。

僕はすぐホッとしたよ。

でもそれからも一人のケンカは時々あつて、何度も『浮気』って言葉が出てくる。

浮気つてなんだろう?シユウは何をしてるんだろう?

そのうち今度はシユウが家を出ていった。

出でいくときミカは居なかつたけど、僕を最後に抱きしめて

『ミカをよろしくな。さよならパノ…』

って言つたんだ。

ショウ、ビニに行くの？僕は嫌だよ。

僕しかいない部屋にミカが仕事から帰ってきた。
ショウが置いていた手紙を読むと、すいへつりたえて泣きながら
電話してた。
他にも色々なところに電話してて、すいへく哀想で見ていられない
よ。

なんでミカをこんなに悲しませるの？
なんで僕をこんなに悲しませるの？

それから何日も何日もショウは帰つて来なかつた。

ミカは毎晩泣きながら僕を抱きしめてショウの携帯の留守番にメッセージを入れていて。

ショウはもう帰つてこないんだろうか？
あんなに三人で賑やかに過ごしてた夜は、今は火が消えたみたい
に静かなんだ。

でもある日、ミカの携帯から着信音が鳴つたんだ。

あ、これショウだよー！ミカ、この音はショウからの電話だよー。

『ショウー・ビニにくるの？早く帰つてきて。帰つて来てよ…』

ミカは泣きじゅくりながら『うん、うん』って頷いてる。でも少

し笑つてゐからきつと帰つてくるんだろう。

よかつた。シユウが帰つて来る。

それからまた何日かすると玄関からシユウの声が聞こえた。『た
だいま』って。

ミカは泣きながら、でも嬉しそうにシユウに飛びついてね、二人
でずーっと抱き合つたままだつた。

「こんなに好きならなんでケンカするんだろ?」

一人ともこんなに好き合つてるのにね…

それからしばらく一人は静かに暮らしてたんだ。

ある日、シユウとミカが荷物の整理を始めた。

たくさんの荷物を引つ張りだしてはダンボール箱に詰めている。

何してんだろ?

だんだん部屋の中がガランとしてきた。

そしてあらかた片付いたとき、シユウが僕を手にとつて「ひづつ
たんだ。

『ミカ。パノを連れてつて』

連れてって？

僕はどうかに行くの？

ショウは一緒にやないの？

なんで三人一緒にやないの？

そして僕はミカと一緒に新しい部屋に来たんだ。

ショウの居ない新しい部屋。

『ごめんなパノ。あなたを見ると悲しいことばかり思い出すの…』

ある日ミカはやつ言つて、僕をダンボールの箱の中に入れてしまつた。

蓋がゆっくり閉まつて光がだんだん小さくなる。

最後に見たミカの顔、すぐ悲しそうな表情だったことは覚えてる。

そして真っ暗になつた。

僕はあれからずっとここにいるんだ。

もうミカの顔もショウの顔もおぼろげになつてきた。

一人とも僕のこと忘れちゃったのかな？

僕はやつと戻れでないよ。僕は今でもここにいるんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4368a/>

パノ

2010年10月8日22時54分発行